

特116
706

放生門
須原蝶
胡蝶
松虫
角仙入
三



始



白宗不家
觀九世
心之印

43116
706

放生川 概説

別能三卷ノ一

鹿島の神職筑波の某都に上りけりしが、恰も八月十五日男山八幡宮の放生會に當れるより社参しけるに、生魚を携へ來れる老翁に會ふ。今日は放生會と聞きたるに、殺生の様不審と言へば、此の魚を放生川に放ちて神の加護を受けん爲めなりと答へ、尚放生會の由来を語りて魚を水に放ちぬ。それより翁は當社の謂を本しく語りたる後、我は代々當社に仕ふる武内の神なりとて山上に登りけるが、やがて神姿を現し、舞を舞ひ、神徳をたへ御代をことほぎ、又和歌の道を讃して失せけり。

大正
10. 5. 30
内交

此曲サラリト淀ミナク謡フベシ

役別	装束	附	季
ワキ 鹿鳴ノ神主	大臣烏帽子(赤上頭拭) 着附厚板 袴狩衣 白大口		八
ワキツレ 従者二人	大臣烏帽子(黄上頭拭) 着附厚板 赤袴狩衣 白大口		月
ツレ 男	着附無地鬘斗目 浅黄縹水衣 白大口 紋付袴帯 男扇	曲柄	二
前シテ 老翁	面小半尉 尉髪 着附小格子 白大口 茶水衣(肩上ケ) 緞子袴帯 尉扇指 左ニ水桶持 右ニ杖突	能	級
後シテ 武内ノ神	面雛尉 白垂 初冠 白鉢巻 着附小格子 茶袴狩衣 色大口 縫入袴帯 扇	(物祗神)(目番初)	
		督吉頃	所
		宮備八山男郡嘉綴國城山	

放生門

世阿彌元清作

ワキ神主 次才上 拍子合
 周影と伴くこの君の歩影と伴
 ぐこの君の四方こそ静ありけれ

ワキ約サラリ

そもろもこれの鹿鳴の神職筑波

の何某はわが事なり。さてても

その度都にぶり。洛陽の寺社疎

あく拜み迎りてゆふ今白の南条の

由承りの川向ハ幡に集積申さざやと
 なじ候通行上朝カニ曇三人あふ都の山の朝ぼ
 らけ赤都の山の朝ぼらけ赤氣色も
 さぞあま幡山ハツ伏見の里も遠から
 ぬ鳥羽の細道フナうち過ぎて元後ヨルの
 橋ツかけまくもカニ奈カやカ津ツ奈ナある
 八幡の里ハにハまマまマはハひヒりリハ幡の

中困里ルにハまマまマはハひヒりリ急キぎギのノ程ハこれ

のさや八幡の里にまきていひ心靜に

社シヤ集サンやヤまマまマはハひヒりリにてい

引ヒろロろロろロのノ生イけるルをト放ハつツ川カハ波ハに

月ツキもモ動ウくクやヤ秋アキの水ミヅ外ソト山ヤマ松マツの

風カゼまマでデもモ津ツのノ惠メのノ聲コエやヤらん

それ國クニとト治シめメ入イとト教カク善ヨシとト賞カガミし

シテ射三人上
 真ノセイ
 拍子合ハテ

シテサシ上二用カニ

悪と云ふ事。直ある所。作のたぬ
 あり。かゝるが故に。知らるは。いふい
 ふ。萬徳と得。無知の。又。惠に。適ひ
 おのづから。積善の。餘慶。殊に。満ち
 善悪の影。影響の。如し。かゝる。影の
 道。廣き。松の。海の。うろ。うろの
 生。ま。け。る。物。と。して。豊。ある。

世に。住ま。し。事。偏に。當社の。法。利。生
 あり。伏へ。て。年。も。子。早。ぶ。る。神の
 ま。ま。に。詣。て。来。て。この。寺。作。は
 照る。概。ら。の。八。幡。山。照る。概。ら。の。八
 幡。山。宮。路。の。あ。は。久。方。の。雨。つ
 ち。くれ。と。涸。して。枝。と。鳴。さ。ぬ。松。の
 風。子。代。の。聲。の。み。い。や。増。し。に。戴。ま

女主人

三

まつる社にお戴きまつる社があ。

ワキカッテサラリ
いかたこれある翁に尋ねる事の内

シテウチテ用カニ
こあたの事にて依か何事にてゆぞ

ワキカッテサラリ
けいん八幡の御事とて皆之儀

浄の儀式の姿あるに翁に限り

生きたる魚と持ち。真に放生の

業不審にてそゆへにげよ清

不審の御理。さてさてけいんの御事

事とは行か知らぬとされてゆぞ

ワキカッテサラリ
けん依これの遠國より始めて集

詣りしてゆ移に委しき事とは

知らず依いでこの御神事とは

放生會とかや申すよあり

シテウチテ用カニ
てこそ放生會とは生けるを放つ

クリ上同サラリ
抄字合ハズ
カ掛

引もろも當社と申すの欽明天
 皇の昔より百餘歳の代々を經
 てこの山に移りおはします
 然るに宗廟の神として所作と
 守り國家と助け文武二つの道
 廣く九重續く八幡山社にも清
 名の八つの文字
 それ諸佛出世の

○サ面杜吟
 ○切逆難子
 シニヤシ上
 用カニ朗カニ

本我空眞性不生の道と示し
 八正道と顯し人佛不二の清心は
 て正直の頭は宿り終み人の
 國よりわが國他の人よりもわが人を
 擧げのせ終み御恵に有難やわれら
 如まのあさましき迷と照し終み
 心のそのほ拍を願まのあたり行

教和尙の清法の袖に影うつる花
 の都を身らんと南の山にすむ
 月の光も三つの夜手に映り給
 つる。さればにや宗廟の跡明に君
 が代のすくある道と顯し。國富み氏
 の寵まで。賑はみ鄙の貢舟海の
 彼も静かあり。利益諸衆生の御

三日月のササメニド
 哲。二世安樂の。祚徳のなほ榮ゆ
 く。や男山に。松立てる。指も草も
 吹く。凡の。みお實相の響音にて。峯の山
 神樂。その。外里神樂。懺悔の心夢
 覺め。夜聲も。いと。祚さひて。月か
 げ。る。みの。石清水の。清からぬ。哲。か
 なげ。に。清からぬ。哲。か。互。不思議

ありとて老入ふ。不思議ありとて老
 ぶよかほご妻しく木綿幣の祓の
 告かや有難や 侍々に依へる古も
 二百餘歳の春秋と送り迎へて祓
 徳と受けし身の鈴武内の神のわ
 れありし名告りもあらず男山魁の
 杖にすがりておどきしてあがり

○難子
 コヨモ
 三上人
 待蓋
 〇

けり山よきてあがりけり 中入間

後シテ武内神上
 拍子合ハス
 出端

なほ照せ侍々に哀らぬ男山代々に
 哀らぬ男山 侍ぐ炭より月影のさや
 かへ出でて隈もあく 光とともにて夜
 神樂の聲澄みふる。氣色かな
 聲澄みふる氣色かあ
 有難や百玉身護の日の光ゆたかに

照す天カ下幾萬代の秋あらん。和老
 の影も年と経て神と忌とたは人の
 臣武内と申す老人あり。東社の各
 各出現して。はま待ら得たる放生の
 祓の所幸と早むれば。周前飛び
 去る鳩の嶺。山下に連ある祓拜
 の社人小忌の夜の袖と連ね

地サアリ
 お早ぶるありあま少女。ス方シテ極静メの月の
 桂の男山地用カニ。おわけま影の郎地用カニから真之序舞
先ラカハ朝カニ
 ○独吟
 ○任舞
 ロンギ上
 拍子三合
 ○オソの祓カニ代も和教とよげ。さそカニの神

代も和教とよげ。舞とまひけるめでた
 ままシテ上。なつかか小忌の流衣とめ。各
 各舞とまひたまひ地サアリ。は四季の和
 歌とよび。その品カへて舞ひ終へ

^{シテ}春の霞の和歌とよびて喜春樂と
 舞やう又^{地上}舞て又夏にかりてのいかも
 る舞をとまひ終み^{シテ}かたへ涼しき川
 水よ涼て見ゆる盃の傾盃樂と
 舞はう又^{地上}始めて長き夜も更る
 風の音に驚くか誰か踏む舞の拍子
 そ^{シテ}秋身ぬく^ヤ目^ヤはのさやかにはんえす

とも秋風樂と舞はう又^上日敷も積
 る雪の夜^{シテ}廻雪の袖と舞へ
 きて百敷の舞には^{シテ}大宮人のかざす
 あり^地櫛と櫛^地諸共は^地花の冠と
 かたむけて^元場谷よりも立ち廻り
 北庭樂と舞ふと^上かやまのみ何と語
 るべき詞の初も^{シテ}時と得てその風

なほも盛さかんで鬼も律りつも納受なうじゆする
申元和教わくわうの道みちこそめめでたたけけれれ和教わくわうの
ラニ道みちこそめめでたたけけれれ。

須磨源氏 概説

別能三卷ノ二

日向國宮崎の社官藤原興範、伊勢參宮の途すがら須磨の浦に到りけるに、一人の老翁柴を背ひて來るに會ふ。翁は興範の問ふがまゝに此の所に名を得たる若木の櫻をほりぬ。源氏の君の舊跡など語り聞かせたる後、其の身の源氏の君なる由をばのめかしていつくともなく消え失せぬ。興範此の所に旅居して尚も奇持を見んと待つと之らに、源氏の君青鈍の狩衣たごとやかに著なきて現れ、昔をよのび、舞を舞ひ、美しき浦の曉に其の姿を隠しけり。

此曲終シテ粘ラ又様ニ誼フベシ

役別	ワキ 藤原興則	ワキツレ 從者	前シテ 熊夫尉	後シテ 光源氏
装束	着附殿敷斗目 白大口 掛素袍 腰帶 扇	着附殿斗目 素袍上下 小刀 扇	面笑尉又朝倉尉ニモ 尉髮 着附無地殿斗目 水衣 腰帶 負柴 杖突	面中將 金地鉢巻 初冠 着附赤地縫袋帯 込大口 單狩衣 差貫 縫紋腰帶 扇
季	三	月	曲柄	目番 五四
所	浦警須郡庫武國津撰	警言順	級	一

須磨源氏

世阿彌元清作

ワキ 神主
ツレ 三人
次 才上
拍子 合

八重の潮路の振の空八重の潮路の
振の空九重いつくあるらん

そもこれの日向の國宮崎の社宮藤

原の興範と反神が事なり

われ鄙の位者なるに依つて未だ伊

勢太神宮へ余ららずの程よこの度

道行上

思ひ立ちら伊勢新宮と志してゆ
 振衣思ひ立ちらぬる朝霞思ひ立
 ちぬる朝霞珠生の空も半にて
 日影長閑は行く舟の浦之邊
 ぎうて遠ざと彼の淡路とよそに
 えて須磨の浦にも志きたけり
 須磨の浦にも志きたけり

早河元カササリ

シテ俯上 朗
 ツヨク 拍子合ハス

やう急ぎの程よ。津の國須磨の浦
 に志きてゆ。この處の閑ま及びたる
 源氏の大将住み給ひしむらまで
 ゆまた承り及びたる若木の梅と
 も一見せばやし思ひゆ
 憂き世の業に懲りすまのあは
 り果てぬ塩木かな 松あらで

また燼と見ゆる。これや真栄の影
 ならん。これば須磨の浦に具るに
 釣と垂れ。焼かぬ河の塩木と運び
 憂まき世と渡る者にてゆあり。又ま
 須磨の山陰よ一本の花の依。また
 おみ若木の梅ある。さうすへ光
 深年の法音跡もさう處にてあり

○小話

げたゆわれら。時き身なれども
 ありし雨夜の物語。聞かとも袖
 と隠して。聞かとも袖と隠して。
 山の薪の重きほも。思ひ梅と折り
 添へて。かの古墳ぞし。木綿花の
 手向の指折とり。心とをさよば
 かりあり。心とをさよば。かりあり。暫

須磨抄

く葉ハをとちりて花ハも眺ハめざやと思
ひハ作ワキカシテらかにこれある翁ハも尋ハぬべき
事ハのハ何事シテウケテにていぞワキカシテその身ハ
眺ハしき山ヤマ眺カシ合アヒあれどもこの花ハは眺
め入り家路ハと忘れたる氣色あり。
もしこの花ハの故ユエある木ハにて作ハか
眺ハしき山ヤマ眺カシと承ウケり作ハへども恐オソれな

シテウケテ用カニ

からそなたとこそ鄙ヒト人トとん奉ホウり
てゆへきすがに須磨スモの若木ワカキの揺ユと。
名ナ木キかみの御事ミコトねは事コト新アラタしう
こそゆへきとワキカシテげハげハは須磨スモの山ヤマ揺ユ。
名ナにあみ若木ワカキの花ハぞとて遠トホざと
て分ワけ入りてシテ用カニわぶと眺ハの御志ミコトノシ
目メもをや暮クれて須磨スモの浦ウラの

ワキカシテ

ワキカシテ

シテウツテ
 山にば里にもお泊りなきて野を
 分けぬよ飛り給みの開よりも
 花にとまらるか須磨の浦花よとまら
 か須磨の浦近き後の山里の深
 としよ物まで名ととりどりの業
 ありた心あまの住居とて人お賤し
 め給ひそよ人お賤しめ給ひそ。

ワヤウカッテ

いかに翁いへこの處は光源氏の
 流着跡。殊におそこの年よりたる
 者なれども源氏の御事物語りゆへ
 忘れて過き古を語らば袂やし
 忘れあしわれ空蝶の空しませ
 と案ずるに桐葉の夕の煙堪へぬ
 思の候をそよいそく虫の

ウリ上地
ツヨク
拍子三合ハク

音ホ響シまシ湊カ茅ダ生フの日露サけキまシ宿スふ
 明アけト暮ル。小ハ萩カかモとノまミしホ
 まテもトくミ給ヒ。御メぐミ
 〇独吟子合合いトもト畏カふカ勅ツにヨりテ初ハ冠カ
 高カ麗ラ國スの相人ニのつづけたりし始メ
 よりハ老カ保ト氏トと名を呼ぶる。常ト来キ
 の卷に中將紅紫の賀の卷に正三

位コ子ト叙シせられテ花ノ宴ノ春ノ夜ノ行キ
 方モも知らず入ル月ノ朧ケならぬ契
 ゆゑ年廿五と中セしテ津ノ國須
 磨ノ浦延虫ノ歎まと身に積みて
 て次ぎの春播磨ノ明スの浦傳ハ
 同をす諸の夢とさへ現に語る人
 人モあらず程に天下に奇持のテ

新編源氏

五

告ありしかば又都に召返され教
 の外の家を移て私の後うら續
 ま。酒標に内大臣少女の養子大政
 大臣藤の裏塚よ。太上天皇かく樂
 と極めて光君とは中すあり。
 ロギ上サリ
 ヨラシ
 ゴそや源氏の舊跡のうらまそ源氏
 の舊跡のふかきそらつづくの程やらん

委しく教へ給へや
 白波のそもその皆その跡と夕暮
 の月の夜と待ち給へ
 奇持と法篋せん
 と見んぞとの侍とかな侍たん月影の
 光源氏の御住家
 昔の須磨
 今の兜率の
 天太子住み給へば

多摩川

天宮の^カカゲ^スに^ト天降^ルりこの^海海子^ト
 歎^ク向^カある^ベべ^トか^ヤうに^申申す^氣氣も^イ
 その^おお^のの^物物語^源源氏^のの^巻巻^の名^イ
 あれ^やや^雲雲^隠隠れ^して^ぞぞ^失失^せせ^はは^けける^ト
 雲^隠隠れ^して^失失^せせ^はは^けける^ト中入語間
 〆^羊羊^用用^カニ
 〆^源源^氏氏^のの^大大^將將^がが^りり^にに^人人^向向^とと^現現^し。
 われ^よよ^きき^紫紫^とと^かか^はは^しし^珍珍^みみ^かか^いい^ごご^やや

〇切遣舞子

今宵の^まま^にに^居居^てて^ああ^はは^もも^奇奇^持持^とと
 拜^まま^んん^とと^上上^等等^用用^カニ
 〆^旅旅^寝寝^して^野野^山山^のの^月月^はは^旅旅^寝寝^し
 て^心心^とと^すす^まま^すす^磯磯^枕枕^波波^もも^たた^ぐぐ^へへ^て
 音楽の^聞聞^{ゆる}ゆる^聲聲^ぞぞ^有有^難難^きき^聞聞^{ゆる}
 聲^ぞぞ^ああ^りり^かか^たた^まま^い
 〆^後後^シシ^源源^氏氏^上上^仲仲^ノノ
 〆^拍拍^子子^合合^ハハ^ス
 〆^出出^端端^ツツ^{ヨク}
 〆^ああ^らら^面面^白白^のの^海海^原原^やや^ああ^わわ^れれ^安安^婆婆^よよ

〆^後後^シシ^源源^氏氏^上上^仲仲^ノノ

ありし時ハ老保身といはれ今ハ
 兜率カウソツにカへり。天上テンジョウの位イ有アれども
 月ツキは珠ジュトて圖エ字ジよとたり。前マヘも須ス
 磨ハの浦ウラなれば青海波セイカイハの遊アソビ舞マシ樂ガク
 引ヒキかれて月ツキの夜ヨ夜ヨの波ナミ返ヘリす
 ある彼の花ハナ散チリる。白衣ハクイの袖スリーブ玉タマの
 笛フエの音ネ聲コエ澄スミみ渡ワタる。望シテ笛フエ琴コト笙シヤウ

○任舞

後ゴ孤コ雲ウンのひゞきヒヅキ天テンもモうウるルや須ス磨マ
 の浦ウラの荒アラ海カイの波ナミ風カゼ志シんン志シんンたりナリ
 雲ウンとあり雨アメとあり。夢ユメ現ゲンもも分ワか
 ざるは。天テンより老シヤウきす。影カゲの中ナカ
 にあアらたあアる。童コドモ男ヲ身ミり終ハシみそや。
 さそひあアしシねみ。老シヤウ保ホ身ミの尊ソノ
 靈レイか。○そのあアもよそソに白ハク波ハのノ

ロンギ上
ノラス
拍子三合一

早舞
重初

舞臺のしや

七

ともとハ神カ住家。なほも地生
を助けんと。兜率天より再びそに
天降る。あら有難の御事や。可
ハ須磨の浦あれば。四方の風も吹
き落らて。層雲かゝる。春の空
林凡釋曰玉のふんよ。降り給ふ
か。と覺えたり。可から山歸へまら

といれ。かゝる。色の綺羅なるよ。
青鈍の持衣たとわかにはなされて。
須磨の嵐も靄。杖も青き海の
波。帆々の鈴も驛路の夜。山より
や明けぬらん。夜は山よりや明け
ぬらん。

須磨の浦

一六

胡蝶

概説

別能三卷ノ三

三吉野に山居の僧、都に上りて一條大宮に到りけるに、荒廢せる古宮の階前に一株の梅花ありて、今を盛りと咲き誇れるを立ち寄り眺めぬけると、そこに、一人の女性出て來り、此の宮の古へを語りければ、如何なる人ぞと尋ねしに、我は人間ならず、花に親しむ胡蝶なるが、梅花に縁無きが悲しければ、御僧に頼り法の利益を受けん爲め來れるなりとて見えすなりぬ。や、あつて梅花の上に胡蝶の姿現れ出で、法の功力を受けしことを喜び、花に戯れ舞ひ歌ひ、明けぬる春の空高と霞にまぎれて失せにけり。

此曲閑カニ垂レ又様ニ誦フベシ

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ僧	役別
胡蝶	女	從僧	僧(上僧)	
面増 紫長絹 腰巻 扇	面増 髮 髮帶 着附摺箔	角帽子 珠敷 無地鬘斗目 水衣 腰帶 扇	角帽子 珠敷 無地鬘斗目 水衣 腰帶 扇	装束 附
(物鬘) 目番三	曲柄	月	二	季
級 四	稽古順	宮大條一市都京		所

胡蝶

小次郎信光作

ワキ僧
ワキツレ
次才上
ヨウク
拍子ニ合

春^{ワカニガ}たつ空^イの旅^イ衣^イ。春^{ウツ}たつ空^イの旅^イ。
 夜^イ日^イも長^イ閑^イあ^イる山^イ路^イか^イな^イ。
 和^ワ州^{シウ}三^ミ吉^{キチ}野^ノの奥^{オク}よ山^{サン}居^キの僧^{ソウ}を^シゆ。
 われ^{ワレ}必^{カナラ}可^{カナラ}よ^{シヨ}は^{シヨ}住^{シヨ}み^{シヨ}ゆ^{シヨ}も^{シヨ}来^イた^イ花^{ハナ}の
 都^トと^トん^トず^トゆ^ト程^{ハジメ}よ^{ハジメ}。この春^{ハル}思^{オモ}ひ^ヒ立^タち^チ都^トに
 上^{ノボ}り^{ノボ}。洛^{ラク}陽^{ヤウ}の^ノ必^{カナラ}不^フ舊^{キウ}跡^{セキ}を^{シヨ}も^{シヨ}一^{ヒト}見^ミせ

ぞやと思ひぬ通行上 用カニ 三吉野の高嶺の
深雪ヤまだ凍えてカ。高嶺の深雪ま
だ凍えて。花遅用カニげある春風の吹ま
くる象用カニの山越えて甲 元震むそあたわ
三笠山用カニの指も楯の葉の廣き時
影の道すくは。花の都用カニはまきはけ
り花の都中 用カニはまきはけり。ワヤ約 元カニ急ぎぬ

間。程あり都元はまきはけりこの處と
くよきねていへば一條大宮とやらん
申しぬ。心静元は一見せむやと思ひぬ。
又これある處と云れぬ由ありけある
古宮フルの軒の檜皮も苔むして昔カニ 中 用カニ
思ふの忘草フスレ。眞用カニに由ある可あり。
又車窓クルマの邊ホトリある。柴垣シバの隙ヒマより

ふれつ。清階ハシのももさへ色殊コトある梅ウメ
花ハナの今と盛サカシとふんえてゆ。立ち寄り
眺めむわしと思ひゆ

呼掛
シテ女メ用ヨウカニ朗ラウカニ

あうあう御僧ミソウのいづくと思へるて。
この梅と眺め終ハシひゆぞ 不思議フキカシテやあ
人あつともてえぬ屋ヤつまより女性ニョメ
人あつ終ハシひ。われよ言葉コトとかけ終ハシみ

ぞや。さてさよばらしくしやしゆぞ

シテ用ヨウカニ

コテての始ハジめたる御事ミコトはてします
かや。まづまづ御身ミミはいつくより来り
終ハシへる人あるぞ 此コノの和州ワシュ三吉野
の奥ウチ子山コヤマ居イの老ラウあてゆ。始ハジめて都
又マタづりてゆ。されつてそん馴ナれやさ
ぬ御事ミコトなり。さへ又昔ムカシより故コトある

月

古宮フルよて。大内オホウチも程シ近チカく。處トコロからあ
 るこの梅ウメと。雲クモの上ウヘ人ヒト春ハルごとく。詩ウタ
 歌ウタ管ケツ絵エの御遊ミユウと催モトメし。眺ミ絶ツクえせ
 奴ヌ花ハナの色イロ心ココロ留トドめては。笑ウツんせよ
 所トコロと。今イマくらる事コトの嬉ウレシし。さよ。さよ。さよ
 こそ。御身ミミのらかな。さる人ヒトぞ。御名ミナと。名ナ
 所トコロと。今イマくらる事コトの嬉ウレシし。さよ。さよ。さよ
 こそ。御身ミミのらかな。さる人ヒトぞ。御名ミナと。名ナ

告ツり終ハみべ。名ナ前マエの人ヒトさ。ま
 ませ。そ。あ。た。の。名ナと。そ。聞キか。ま。ま。ま。
 け。れ。名ナ前マエは。の。住スめ。ご。も。心ココロあ。ま。ま。身ミ
 の。山ヤマ縣ノの。年トシと。経ヒて。住スむ。家イヘ様サマを。心ココロ
 変カへ。て。だ。れ。の。都ミヤコの。花ハナ盛サカい。心ココロと。止トめ。
 て。色イロ深フカま。梅ウメが。香カよ。み。昔ムカシと。聞キへ。ば
 春ハルの。月ツキ昔ムカシと。聞キへ。ば。春ハルの。月ツキ。答コタへ。ぬ。

月業

影も我が袖に。移る白も年と経る
古宮の軒端。昔むして昔恋しき
神がなと。何と明石の浦に住む
蛭の子あれ。宿とたよ定あま
身は。死しや定あまの身は死し
や。女はあまこの宮の得又御身
の名も妻し。御物語の心入

古

四

シテ用カニ

このみ色むもあかなかよ。人がま
し。や思しるされん。さうりあから真
われの人。あらず。われ春木の
花よ。心と深め。指又遊ぶ身あり。あれど
も。深き望の。あま身あり。あどや
らん。昔より。梅花は。縁なまき事と
歎きの。来る。春毎に。悲みの。後の。色

四

七

舞人色々の。所毎に飾る金銀の
籠又さす山吹の。蓑の夜と懸け
終み花園の胡蝶とさ入や下草
に秋まつ虫は。疎くふるらんと詠
めり。昔倍と夕暮の月もさ
入る宮のうち人目稀ある木の下
宿らせ終入秋が。夢に必ずるゆ

べと夕の空に消えて夢の如くあ
りけり夢の如くはありけり中入間

○切近雜子
三人待詠
三止事
用カニ朗カニ

あだ一夜の夢まつ春のうた寝に
夢まつ春のうた寝よ頼むかひ
あま契ぞと思ひあからも法の聲
立つるや花の下臥は夜かたしく
木陰かあ夜かたしく木陰かあ

月葉

後ニテ胡蝶上
声
拍子ニ合ハス

有^ウ難^ニやこの妙^{ミウ}典^{テン}の切^キか^カに引^ヒかれ
有^ウ情^{ジウ}非^ヒ情^{ジウ}も隔^ヘあ^クく佛^{ブツ}果^{クワ}に至^ニ
る花^ハの色^{シキ}深^{フカ}ま^マ恨^{ウラミ}と晴^{ハル}し^ツ
梅^{ウメ}花^ハと戯^{タシ}れ^レ白^{シロ}に交^マは^ルる胡^コ蝶^{テウ}の
精^{セイ}魂^{コン}あ^ラは^レたり^{タリ}有^ウ明^{メイ}の
月^{ツキ}も思^{オモ}ひ^ヒ添^ソみ^ミ花^ハのよ^ヨぶ^ブもさ^サも
美^{ウツク}し^シま^マ胡^コ蝶^{テウ}の姿^{サマ}の現^{アラハ}れ^レ鈴^{スズ}み

○蝶子
コヨロシ

はありつる人が
スといはいかで

○独吟
○仕舞

夕^{ユフ}暮^ク又^{マタ}か^カは^ハす言^{コト}茶^{チャ}の花^{ハナ}の色^{シキ}隔^ヘ
てぬ梅^{ウメ}又^{マタ}飛^トび^ビ翔^{セウ}り^テて^テ胡^コ蝶^{テウ}にも
誘^{サユ}は^ハれ^レあ^マま^マ心^{ココロ}あ^リて^テ八^{ヤチ}重^{ジュウ}山^{サン}
次^{ツギ}も隔^ヘて^テぬ梅^{ウメ}の^ノ花^{ハナ}に^ニ飛^トび^ビか^カし^シ胡^コ
蝶^{テウ}の^ノ舞^{マユ}の^ノ枝^{エダ}も^モ白^{シロ}み^ミ氣^キ色^{シキ}カ^カ茶^{チャ}中^{ナカ}之^ノ舞^{マユ}
四季^{シキ}折^セ々の^ノ花^{ハナ}が^ガかり^リ四季^{シキ}折^セ々の^ノ

月蝶

松 虫 概 説

別能三卷ノ四

昔攝津國安倍野を二人の旅人うち連れて通りけるが、折ふし松虫の音の美しく聞えければ、一人の者行きて見しに、彼の者草露に卧して空しくなり居れり。悲しみて其の死骸を土中に籠めけるが、後年徑て此の野に酒を賣る市人の所に、酒を好みて日毎に来る者あり、市人其の者の身の上を尋ねれば、昔の事など物語りて舞を舞ひ、更けゆく秋の夜すがら千草にすたと虫の音を聞きて興がるとみえしがいつしか叢の中に其の姿を失ひけり。

今白も来りてゆゑにわらあるもの

ぞと名を尋ねざやと存じぬ

シテ男四人 朗カニ
ツレ男
次才上
拍子ニ合

もとの秋をも松虫のもとの秋をも

松虫の音にもや友と悲よらん

シテサシ上
拍子ニ合

秋の風もけゆくまは長月の有切

寒き朝風も袖ふれつく市人の

伴ひ出づる道のべの草葉の露も

深緑立ち連れ行くや色々の簑

代夜日も出でて所倍の市路も出づ

るあり遠里あから程近まこわ

佐の江の浦傳ひ潮風も吹くや

岸野の秋の草吹くや岸野の秋

の草も響きて仲つ彼聞え

て聲が友誘ふこの市人のかず

かつす^ツは^甲元^ハ飛^ヒね^ニも^サ行^キま^ス人^モ行^ク所^ニ倍^ニ
 野^ノの^イ原^ハ面^ニ白^クや^イ所^ニ倍^ニ野^ノの^イ原^ハ
 面^ニ白^クや^イ傳^ヘ聞^ク白^ク樂^ク天^カ酒^ニ功^ニ
 贊^セと^サ作^リし^ハ現^ニ今^ニ詩^ノ酒^ノ友^ハ今^ニは^ハ知^ラ
 ら^レて^ハ市^ノ館^ノよ^ク樽^ニと^ス急^ニ盃^ニと^ス並^ニ
 べて^ハ寄^リ来^ル人^トを^シ待^チち^リ居^タり^ト
 い^ハか^ニ人^ガ酒^ヲを^サれ^ル人^ニ神^ガ宿^ハの^事
 白^ク先^ラカ^クヒト^トサ^テサ^レル^人シ^テカ^ニ全^ク明^カニ

賣^ル市^ノよ^クあ^らね^ども^ハ買^ハ方^ノの^門へ^お
 人^トさ^わぐ^と詠^ミ一^も故^ノ人^ノ心^ハあ^る
 へ^ハい^ハか^ニ人^ガ面^ニは^ハ醜^ク酒^ニと^似み^て
 も^てあ^り終^入又^ハか^ノ人^ノ来^レる^そ
 や^ハ今^ハ白^クから^りより^ハ酒^ニと^混入^シ遊^ハ樂^ハ遊^ハ
 舞^ハの^和歌^と詠^ハ人^ノ心^ハと^慰め^給へ^ル
 早^クあ^り席^リ終^ひそ^とあ^らし^ミ行^ハわ^れと

とも限らじや^甲松虫の音も^乙盡まじ。
 いづまで^丙草の^丁いつまでも^戊愛らぬ友
 こそは^己買ひ得たる^庚市の^辛寶あれ^壬買
 ひ得たる^癸市の^甲寶あれ^乙いかに^丙申しゆ。
 唯今の^丁言塔の^戊すゑよ^己松虫の^庚音に^辛友を
 悉ぶと^壬承り^癸ゆめい^甲かなる^乙謂^丙み^丁て^戊ゆぞ
^{シテウケテ}さん^己び^庚それ^辛いつ^壬き^癸そ^甲物^乙諸^丙の^丁ゆ^戊諸^己つて

^{シテ語}聞^{キカ}せ^申し^ゆべ^ー ^{ワキ}さら^リば^御物^語の^ゆへ
 昔この^阿倍^野の^松原^とある^人二人^連
 れて^通り^に折^節松^虫の^聲面^白
 く^聞え^るか^ら人^の友^人か^の虫^の音
 と^慕ひ^行き^に今^スの^友人^や
 久^く侍^てども^席ら^ざり^し程^に心
 も^こなく^思ひ^尋ね^らま^され^ばか^の

者草露に飲して空しくある死あは
 一雨とこそ思ひてていそも何といひ
 たる事そとて位き悲めどかひそ
 あふ 下多回 中用カニ 去中子埋れ木の人知
 れぬとこそ思ひて 甲 朽ちもせて松
 虫の音よ友と悲ぶ 乙 虫の音よもれけ
 るぞ悲しき 丙 へうもその友と悲び
 〇小謡

て松虫の友と悲びて松虫の音よ
 諷つれて市人の身と變へて七き跡
 の七霊そにありたり 甲 船しやこれ
 まてあり立ちすかりたる市人の人
 影又隠れて阿倍野のかたよ帰りけ
 り阿倍野のかたよ帰りけり 乙
 不思議やこそ是との世にも七き影

カハル中ニラカ入カニ

ロギ上サリ

お切

少くも疎しつゝこの後の友人の名残を
 暫く留め終へ松節秋の暮松虫
 も鳴くものせとわれと侍つ聲あらん
 上地^{サラリ}心あま虫の音のわれと侍つ聲
 ぞと何れ^サからぬ言葉かあ虫の
 音も虫の音も昔よ友とばまてむ
 一甲^ト言の葉にもかふるらめ^{上地^{サラリ}}げに

げに思ひ出したり。古き教ほも秋の
 野よ入松虫の聲すあり^{地^朗}われか
 と行きて。いご巾をん思めすか人々
 有難やこれぞ真の友と昔よそよ松
 虫の音よ侍ひて帰りけり虫の音
 見つれて帰りけり^{中入間}
 待^上松風寒まこの原の松風寒まこの

待^上松風

中入間

原の草の假寝の^カところを^トして^ト跡^ト法と^ト
あ^トして夜も^トす^トから^トかの^ト跡と^トみ^トぞ有^ト
難^トま^トかの^ト跡と^トみ^トぞ有^ト難^トま^ト

後シテ男靈上ニ強ク確カリ
一声ツツク
拍子ニ合ハズ

あ^トら有^ト難^トの^ト御^ト吊^トや^トあ^ト秋^ト霜^ト又^ト枯^ト
る^ト虫^トの^ト音^ト聞^トけ^トむ^ト闇^ト像^トの^ト秋^トに^ト滞^トる^ト心^ト
あ^トな^ト郊^ト原^ト又^ト朽^トち^ト残^トる^ト魄^ト靈^トを^トれ^トま^トで^ト
来^トり^トた^トり^ト嬉^トしく^ト吊^トひ^ト絵^トも^トの^トか^トあ

ワキカヒ兵

わ^トや^ト夕^ト影^トも^ト深^ト緑^ト草^トの^ト花^ト色^ト露^ト深^ト
ま^ト具^ト方^トと^ト忍^トれ^トべ^ト人^ト影^トの^ト幽^トま^トえ^トゆ^トる^ト
あ^トり^トつ^トる^ト人^トが^トあ^トか^トな^トか^トな^トれ^トわ^トも^トと

よ^トりの^ト昔^トの^ト友^トと^トあ^トは^ト悪^トぶ^ト虫^トの^ト音^トと^ト
も^トあ^トら^トな^トれ^トて^ト辛^ト向^トと^ト受^トくる^ト草^ト衣^トの^ト

浦^トは^ト難^ト波^トの^ト里^トも^ト近^トま^ト阿^ト倍^トの^ト市^ト
人^ト馴^トれ^トな^トれ^トて^ト用^トみ^ト人^トも^ト用^トは^トる^ト

○小謡

われも ワキニシ 古今こそ シテ 忘れども ウレ 故郷 上巻同サアリ朝カニ
み ウレ 住み ウレ の ウレ 同じ ウレ 難波人 ウレ 住み ウレ の ウレ 同じ ウレ
難波人 ウレ 蘆火 ウレ 焚く ウレ 屋も ウレ 市館も ウレ
寝 ウレ たらぬ ウレ 契 ウレ と ウレ 悪草 ウレ の ウレ 忘れ ウレ えぬ ウレ 友 ウレ
ぞ ウレ あり ウレ あら ウレ あつ ウレ かり ウレ の ウレ 心 ウレ や ウレ 忘れ ウレ て ウレ
年 ウレ と ウレ 経 ウレ も ウレ の ウレ せ ウレ と ウレ ま ウレ た ウレ 古 ウレ に ウレ 席 ウレ る ウレ 彼 ウレ の ウレ
難波 ウレ の ウレ 事 ウレ の ウレ よ ウレ り ウレ あ ウレ も ウレ げ ウレ り ウレ 隔 ウレ お ウレ ま ウレ

○サ由獨吟
○切達難子

友 ウレ と ウレ ち ウレ かつ ウレ 朝 ウレ も ウレ 落 ウレ 花 ウレ と ウレ 踏 ウレ ん ウレ て ウレ 相 ウレ
伴 ウレ つ ウレ て ウレ 出 ウレ つ ウレ 夕 ウレ ま ウレ は ウレ 花 ウレ 鳥 ウレ に ウレ 後 ウレ つ ウレ て ウレ 一 ウレ
時 ウレ に ウレ 帰 ウレ る ウレ 然 ウレ れ ウレ ば ウレ 花 ウレ を ウレ 遊 ウレ 樂 ウレ の ウレ 境 ウレ
送 ウレ 風 ウレ 月 ウレ の ウレ 友 ウレ に ウレ 誘 ウレ れ ウレ て ウレ 春 ウレ の ウレ 山 ウレ 邊 ウレ や ウレ
秋 ウレ の ウレ 野 ウレ の ウレ 草 ウレ 葉 ウレ に ウレ す ウレ だ ウレ く ウレ 虫 ウレ ま ウレ て ウレ も ウレ 聞 ウレ
け ウレ だ ウレ 心 ウレ の ウレ 友 ウレ な ウレ ら ウレ ず ウレ や ウレ 樹 ウレ の ウレ 陰 ウレ の ウレ 宿 ウレ
も ウレ 他 ウレ 生 ウレ の ウレ 縁 ウレ と ウレ 聞 ウレ く ウレ も ウレ の ウレ せ ウレ と ウレ 一 ウレ 河 ウレ の ウレ

○仕舞

信及みて知るその心清からぬや。奥
山の深谷の下ノの菊の水ノ汲も汲
ぬもよも盡ききテ流水ノ盃ハ手マ
つ遮ぎれる心あり。されば盧山ノ古
虎ノ穴と去らぬ室のたのぞの戒と
破りしも志と清らぬ思の露の玉
水ノけいせまと出て。道とかわ

○獨吟
○二調

シテ上 朗カニ

○それハ賢子の古の世もたけ心さえて。
道有る友人ノ教々積善の餘慶家々
に普く廣き道とかわ。今の濁世ノ
人回るらぬ松まわれらにて心もうつ
ろみや菊とたへ竹葉ノ世ハ皆醉
つららわれひらり醒めもせて萬
亦皆紅葉せりたら松虫の獨音ハ友と

侍ら詠をありて舞ひかあて遊ばん。

シテ中確カリ
拍子合ハス
ツヨク

ワカ上 確カリト明カニ

○仕舞

面白や。お草はすなく。虫の音の

機織る音の。まがりたりあよう。

まがりたりあよう。つづり刺せてよ

蟋蟀茅蜩。色々の色音の中は。わきて

種か。おび松虫の聲。りんりんり

地 用カニ

月 サラリト段々進ム心

黄涉早舞

んとして。夜の聲。冥々たり。上 輝シテ

や。難波の鐘も。明方のあさまほも

ありぬべし。さらさら。友人名残の袖と。

招く。尾花のほのか。おんえ。跡絶え

て。草花がたる。あいたの。息よ。草花

がたる。あいたの。息は。虫の音は。かりや

残るらん。虫の音は。かりや。残るらん。

一角仙人 概説

別能三卷ノ五

天竺婆羅奈國の傍に一角仙人とて鹿の胎内より出生したる通力自在の仙人あり。此の仙人海中の龍神と争ひ、通力を以て龍神を岩屋の内に封じ込めたれば、久しきに亘りて雨降らずなりぬ。此の國の帝一臣下に命じ、旋陀夫人といへる美妃を伴ひ、道に迷ひたる體にて彼の山中に至り、酒を勧め、美妃の容色を以て彼の仙人を迷はせ、其の通力を失はしめ、龍神の封を解くべしとありしかば、臣下命のまゝにすれば、仙人は夫人の色に溺れて通力を失ひ、龍神は悉く岩屋を脱しけり。

此曲花ヤカニシテハ位ヲ取り中頃ハ優ニ切ハ強クサラリト誼フヘ

子方 (龍人二人)	ワキツレ 全從者	ワキ官 人	ツレ 掖陀夫人	シテ 一角仙人	役別
縫紋腰帶 打杖	着附厚板 白大口 腰帶 扇	着附厚板 白大口 法被 紋付腰帶 扇持銀佩ク	舞衣又ハ長絹 腰帶 扇	面連面 髮 髮帶 天冠 着附摺箔 緋大口	装束附
(能賜畧) 目番五、四	曲柄	月	九	季	
級	三	誓古墳	中山國奈羅波竺天	所	

一角仙人

禪風元安作

ワキ官人白サリ
 引れハ天竺波羅那國の帝王に仕

奉るは下なり。さてもこの國の

傍よ。一人の仙人あり。鹿の胎内に

宿り出生せり。故より。類は角一つ

生ひ出でたり。されは依つてその名

と「角仙人」と名づく。さる子細あつて

一角仙人

龍神リウジンと威イと争マシひ。仙人ジン神通ツウを以
 つて諸龍シヨリウと悉コトく岩屋イハヤの内ウチに封フウ
 じ籠コウむる回数クワウ見雨ミアメ下シタらすの帝ミカド
 この事コトと歎ナゲき給たまひ。種イロ々の法ゴ方便ベン
 を廻マゲらし給たまひ。こゝココに換カヘ院イン丈人サヤと
 て並ナラあまマ美人ビイのハお座マゆユと踏フミみ迷マヨ
 ひたる換カヘ人のハおくクにニてテ仙境セウケンを

分け入ワケり給たまひ。丈人サヤよヨひと後ノチにニ非ヒ
 通ツウと失ウシひ事コトもああるるべべままとの法ゴ方フ
 便ベンより丈人サヤを具グへ奉ホウり。唯タ今イマ
 かの山路サンジにニおおけけ入いりりのノ山ヤマ遠トウうう
 しての雲クモ行ユキ客キヤクの跡アトと埋ウラみ松マツ寒サムイうう
 しては風カゼ換カヘ人のハおおすすも破ヤるる假カ寝ネ
 月ツキや露ツルギ時トキ雨アメもも山ヤマ陰カゲの下シタ紅ベニ葉ハ
 一ヒト角ツノ仙人ジン

もる山陰の下紅葉。色そよ秋の風
 までも身えん入にえん入みまえん入る旅衣。霧
 回と凌シコトぎ用丸心雲とシコト分シコトけ用丸心。たえんつえんきもえん知ら
 ぬ山シコト中シコトにえんおえんまえんつえんかえんあくも踏シコトみシコト速シコトみ
 道シコトの行シコト方シコトの如シコトくシコトあらシコトん道シコトの行シコト方
 は如シコトくシコトあらシコトん目シコトと重シコトねシコトて急シコトぎ
 の程シコトよシコトらシコトくシコトもシコト知らぬ山シコト路シコトをシコトおシコトけ

シテ仙合サシ上
 拍子三合文

へつて伏シコトぞシコトやシコトそシコト又怪シコトしシコトきシコトのシコト巖シコトの
 陰シコトよりシコト後シコトきシコトなるシコト風のシコトかシコトうシコトぐシコトく
 松シコト檜シコトの枝シコトとシコト引シコトきシコト結シコトびシコトたるシコト庵シコトあり
 若シコトしシコトかのシコト仙境シコトすシコトてもシコトやシコトゆるシコトん暫シコト
 くこのシコトあシコトたりシコトにシコト離シコト個シコトしシコト事シコトの由
 をシコト窺シコトはシコトぞシコトやシコトと思シコトひシコトひシコト
 船シコトにシコトのシコト谷シコト健シコト一シコト滴シコトの水シコトとシコト納シコトめシコト日シコト鼎シコトよシコトは

青い教序の雲と煎す曲終へて
くんえず。江上数峯青かりし楮
も今の紅の秋の氣色の面白や
早月カッテ
いかにこの庵の内へ申すまじ事のゆ
シテ重シモリ
不思議やこゝの高山重畳として
人倫通のぬ所あり。それも御身は
如何ある者ぞ。ワキサクラ
これのたゞ山路は

踏み迷ひたる旅人あるが。日もやう
やう暮れかり前後と怠りて作。
一夜の宿と御貸しゆへ。シテ兩カニ
こそ人問の交りあるまじ可あらず。
運シテ
とくそく席り終へとも。ワキサクラ
問の交りあきこはさては天海の
栖かやらんまづまづ改めとんせ終へ

シテ用カニ

このよはは死ハカしあから種カが姿カ接人カ

○小謡

よまみえ申上さん上と上。案案の樞樞と推推

し開開まま。案案の樞樞と推推し開開まま。

出出づるその姿姿。緑緑の髪髪も生生ひひのぼぼる

牡牡鹿鹿の角角の東東の向向もも仙人仙人をを今今もも

事事ぞぞ思思議議あるある。唯唯今今思思ひひ出出だ

してしてるる。ささててのの承承りり又又びびたたるる。一一角角仙仙人人

にてにて流流るるゆゆかか シテ用カニ 式式んんびびらられれとと一一角角と

申申すす仙仙人人ままてていいささててささてて面面ををととんんややせ

べべ世世のの夢夢のの換換人人ままああららずず。ささもも美美し

まま宮宮女女のの貌貌核核のの雲雲羅羅綾綾のの衣衣更更

ににたた人人ととはは見見ええ給給ささずずゆゆ。れれのの如如夕

ああるる人人ををままししまますすぞぞ フキサテ フキサテ又又申申す

ぞぞくく踏踏みみ迷迷ひひたたるる換換人人ままてていい接接の

疲ツカレの慰ナクサミに酒シユと持ちちてゆユつコトまコー
 百ヒヤクれハくニいハやニ仙シヤン境キヤウの松シユウの葉エフと好ス
 きキのコト身ミは著キて桂ケイの露ロと甜ナめメ幾イコウ
 年トシ経ツれドも不フ老ラウ不フ死シのこの身ミあり。
 酒シユと用ヨウゆる事コトあるまじマむム作サの
 ころ御事ミコトコトあれども。たタ志シと受ウけ給キヨム
 へと夫ウツ人は酌シヤクはまマち給キヨムひヒ仙シヤン人は酒シユと

○小謡

勧カむムれレばバげゲに志シと知チらラざザらんンの鬼キ畜キウ
 又マあアはハ方ホウるルとト夕セキの月ツキの盃サイと
 夕セキの月ツキの盃サイと受ウくるクその身ミも仙シヤン人ニン
 の折ヲる袖スエ自ジみ菊キクの露ロおオちチ拂ハラみミにニも
 ふフ代ダイの鏡キヨウぬヌべベきキ契セキのウひヒぞゾ始ハジめメあるル。
 面オモ白シロや盃サイの面オモ白シロや盃サイの廻マるル光ヒカも
 照テりリそソまマや紅ベニ城シヤウ衣イの袂タビと共ト共ト子コ舞マユ

一 翻す舞樂の曲ぞ面白き静人の樂カサキ
 一 系竹の調よりどりどり系竹の調より
 一 どりどりさす盃も度々廻れど夫人の
 一 情よ心と移し飛仙人の波身アシに足弱車ヨクバルマ
 一 の廻るもたゞよみ舞の袂ニセとほ敷きハク
 一 せ進ば夫人の悦ヨクび宿人ヤクを引ツき連れ遙ハルカ
 一 がありし山路ミチと凌トぎテ帝都ミヤコは帰カら

せ用。給ハひけり亮。
 一 上ノ手テ持テてサらリカキりけれハ岩屋イハヤの内ウチ頻ヒに鳴ナ動ウしテ
 一 天地テンチも知チ音ネくハかりナりアらズ不フ
 一 思議シギや思オモはずも人の情ナニの盃ハクも
 一 碎クひク然シたりしその隙ヒは龍リウ神カミを
 一 封フじテあラ置キまシ。岩屋イハヤの俄ハに鳴ナ
 一 動ウするハ何ナニの故ユであるナやらん

大雨と降らし。供水と出だして立つ白
 波よ。飛び移り。左つ白波よ。飛び
 移つて。また龍宮ふぞ。帰りける。

大正拾年一月廿五日印刷
 同 年一月三十日發行

著作権
 許不慙

訂正著作者 廿四世 觀世元滋



發行所 檜 常之助

京都市上京区二條通麩屋町東北角

發行所 檜 大瓜

東京市神田區錦町二丁目拾番地



印刷所 江川堂

東京市四谷區傳馬町貳丁目



終